

やまぼうし通信

NO. 128 2022年10月20日

時代・社会の変化とともに、やまぼうしはもうすぐ22年目へ！！

われわれ認定NPO法人やまぼうしは年が明けると22年目を迎えます。前号でもお伝えしたように、すでに先を見据えて動きだしています。「継続は力なり」という言葉がありますように、やまぼうしはこれまでの活動を通してそれ相応の力を携えています。しかし、その力をどのようにまとめるのか、どのように使うのか、どのようにさらに育てていくのか、課題はたくさんあります。

今回、やまぼうしグループホームつぐみに勤務され、先日の定期総会で永年勤続賞の表彰をされた嶋本繁喜さんに寄稿していただきました。やまぼうしが誕生する前からの長い福祉現場での経験で得たこと、培ってきたものを伝えていただきました。

「基本から」「原理・原則から」をたいせつに

2022年9月 嶋本 繁喜

2022(令和4)年6月24日に開催された「2021年度定期総会」の場で10年以上勤続の職員に対する「永年勤続賞」の授与があり、17年超勤続の私もそのうちの一人として感謝状と記念品をいただきました。働き続けさせていただいたことを私のほうこそありがたく思っています。また田舎の母のこと等のため、今年3月から非常勤職員にさせていただいたことについても感謝しています。

さて、私が障害福祉にかかわり始めたのは1981年4月からでしたが、当時「精神薄弱者・児施設」と言われていた東京都東村山福祉園、つづく「身体障害者療護施設」東京都日野療護園、日の出福祉園で働くなかで、

○「知的障害(当時は『精神薄弱』)あるいは障害とはどういうことなのか、またどう支援すればよいのか

○障害のある人の自立を問うならば、同時に支援者の自立も問われなければならないのではないのか

こうしたことをずっと考え続けるようになっていました。

また、自分の「言葉」は利用者さんに伝わっているのだろうか、ということも考えるようになっていきました。とりわけ《やまぼうし》に入職し、「軽度」の知的障害のある利用者さんとかかわるようになってから、そのことをより考えるようになりました。これは日々の仕事の中でも使っている「アセスメント」「エンパワーメント」「ケアマネジメント」等、社会福祉にかかわる言葉にとどまらず、日常会話でも利用者さんに私の言葉は届いているのだろうか、届けられているのだろうか、感じていました。

これらのことについては、これまで先輩から学んだり、障害福祉について本を読んだり、研修に参加をしたりと、勉強を通して一定の答えを見つけることができたと思います。その過程で一番大きな学びとなったのは「利用者さんとかかわる中で学んだこと」だと思っています(実践は道半ばですが)。

○心身の機能だけに着目するのではなく、その人の全体像を把握すること

○利用者さん一人ひとり、個人の状況に合わせて環境を調整すること

○グループホームの利用者さんであれば、ホームだけでなく通所等もあわせた生活全体を見直し、調和を図ること

○利用者さんをサービス種別・制度に当てはめるのではなく、なければ創り出していくこと

私は最近、《やまぼうしホーム》での仕事が多くなっています。そうした中、1989年(平成元年)のグループホーム制度創設に、厚生省障害福祉専門官として障害福祉課長の浅野史郎さんとともに尽力された中澤健さんが今年7月に亡くなられたことを知りました。その中澤さんが残された言葉をご紹介します。と思います。

『障害者が長く管理されてきた歴史に鈍感になってはいけません。ふつうの暮らしがしたいという本人の願いが基本です。福祉職員は、その専門性で理念を構築すべきです。専門性が難しければ、もし自分が入居者ならどう感じるか、自分に当てはめて考えることはできるでしょう。(中略)福祉従事者に期待します。多くの本人の声を聴いてください。福祉とはそもそも

何だったのか、熱く議論してください。巻き込み語り合い、みんなで時代を創って欲しいのです。少人数と管理性の排除はグループホームの“命”です。“命”は大切に守らなければなりません。行政も現場も、この点を共通理解し、それぞれの役割を果たせば、後は時間をかけてその質を高める努力をすれば確かな道がたどれます。障害を持つという理由で願いが切り捨てられる理不尽を、決して許さないという覚悟が必要です。』

『グループホームは当初、4～5人での暮らしへの支援という考え方でした。が、「当たり前暮らし」という建前から考えると変です。人は縁もゆかりもない数人のグループで暮らすのが当たり前ではないからです。そこでゆき着いたのは「暮らしの基本は世帯もしくは個人」という当然のことでした。』

《やまぼうし》は、国・都・市の動向、地域の課題を見つめながら、事業展開を計画的にすすめてきたと誇りをもっていますが、これからもその姿勢を堅持しつつ、あらためて、障害のある人の支援という基本に立ち返ったところから取り組みをすすめていければと思っています。私自身としては宿題ばかり積み残してきた17年でしたが、これからも継続して考え、できれば実践していきたいと思っています。

以上



●法人の持続と発展について

以前、やまぼうし通信の中で伊藤理事長は『大切なのは、「やまぼうしの原点」を見つめ直すこと、その上で法人の「ミッション（使命）の再構築と法人の組織、事業、財務の三分野での改善改革の指標づくり」に取り組んでいくことが求められる』と述べました。この取り組みは今も続けられています。ここではやまぼうしの原点といえる「やまぼうしの目指すもの」を記します。皆さんの心に留め置いていただければと思います。

『やまぼうしは、浅川流域に沿った多摩の地域で、自然と人と共に豊かに生きられる“まち”をつくりたい』
そんな想いで生まれました』

『やまぼうしは、豊かな自然を守り、はぐくみながら、障がいのある人もない人も、お年寄りや子ども達も含めた誰もが「自分らしく」暮らせる地域社会の実現をめざしています』

『やまぼうしは、障がいのある人の地域での多様な暮らしの場と働く場づくりを中心に毎年度の重点課題を設定し、事業をすすめています』

『やまぼうしは、障がいのある人、家族はもちろん支援スタッフやサポーター、通信購読者も共に会員登録をして会の活動を支えあっています』



●事業所の閉鎖と移転についてのご報告

就労継続支援B型事業所「スロウワールドふれあいの森」はコロナウイルスまん延の影響もあり、近年経営危機に瀕してまいりました。商品やメニューの開発、業務態様の転換など事業存続に向けて取り組んできましたが、事業撤退という判断をし、7月末で事業所は廃止、利用されていた方は希望に沿って別事業所に引き継ぎをしました。

また、これに伴いカフェ事業での実績をもつ就労移行支援事業所「れんげ」が、入れ替わる形で平山台から移転することになりました。「スロウワールドふれあいの森」が運営していたカフェは「れんげ cafe」としてリニューアルオープンし、8月1日から営業をしております。

なお、生活介護事業所「スロウワールドおちかわ屋」は多機能型事業所から単独の事業所となりました。就労移行支援事業所「れんげ」を含む多機能型事業所「れんげ」はこれまで通りです。

●ホームページリニューアルのお知らせ

法人のホームページを新しくしました。URL は <https://www.yamabousi.org> です。